母と子の桜映画社作品

最上川風土記（全2巻）

スタッフ

監修　山形大学教授理学博士　長井政太郎
製作　山口弘道
脚本　加藤松三郎
演出　丸山章治
撮影　岡田三八雄
音楽　渋谷修
録音　安部恒雄
解説　長島金吾
進行　村上雅英
協力　×　×　×　山形県及び山形市外撮影関係市町村

白黒二巻　三五ミリ一九八〇呎　十六ミリ七九二呎
上映時間　二二分
価格　白黒十六ミリ三〇,〇〇〇円

解説

本映画は社会科教材用及学校教材用として企画されたものである。

昔から文化は河川の流域に源を発するといわれる。

河川は土地を肥沃にし、舟運に成立ち諸産業の発達を促し、人間の生活に大きな寄与をしてきた。そして町や都会の多くはその沿岸に発生し、そして繁栄したのである。

しかし、他面、河川は洪水により耕地を荒し、橋梁や家屋を破壊流出させ、人間や家畜にも被害を及ぼすなど、ときには人間の生活に甚大な損失を与えることも決して少くはない。

現代では科学の急激な進歩に伴い、陸上の各種交通機関や航空機等の発達の影響をうけて、河川による舟運の利用は減殺されたけれども、他面、ダムの建設によって河川は電力源として、新たに大きな役割を果している。

ダム建設に伴って、その河川の流域の都市と農村の電化と、洪水の防止、かんがいなどによって、農業も一そう発達し工業も発達してゆく。

わが国は、地勢の関係から、河川の頗る多い国である。従って昔から河川の利用と水害については、数多の努力と、経験が重ねられている。

しかし、まだまだ多くの河川は只、無駄に流れている感が深い。河川の問題こそ現代日本の重大な社会的問題と云わなければならない。

本映画の意図は以上の意味で現在の日本で最も開発の遅れている、河川の一つである最上川をとりあげて、日本の河川の一つが出って来た歴史を、人間の生活と結びつけて解明し、その流域の住民の今後の生きる道は何処にあるかを暗示しようとしたものである。

ストーリイ

日本三急流の一つといわれる最上川は山形県の南に端を発し北上して日本海に注ぐ。大きな川としては珍らしい県内に発し県内に終る川である。

この国は昔から最上川の水を利用して水田を開き農業は稲作を主業としていた。そしてその収穫米の一部は最上川の舟運によって、酒田港に運ばれ、遠く日本海を下り関門海峡から瀬戸内海を経て大阪や遠く江戸にまで運ばれた。

ところが江戸時代の中期、麻の原料となる青苧（アオソ）や紅の原料となる紅花（ベニバナ）が最上川流域の畑地に栽培され、それが良質のために特に高価に取引された。

特に紅花は、紅一匁は金一匁に価したといわれる程高価だったために、紅花の栽培は繁盛を極め、今の山形市には紅花の市が立ち、多くの紅花商人が生れた。

現在の山形市の有力な商人の祖先の多くは紅花商人であった。俳聖芭蕉が奥の細道で訪ねた尾花沢の鈴木清風も紅花大尽といわれる紅花商人であった。

しかし、これらの特産物も時代の変遷と共に衰え、新に養蚕、果樹類がこれに代り、それに陸上の交通機関の発達に伴い、最上川の舟運も止り、暫くは最上川は稲作かんがい以外は無駄に流れているに過ぎない感を深くした。

最近に至って、電力によって最上川の揚水を企画し、畑地の水田化も進められ、特に品種改良や耕地整理による稲作栽培の画期的改革が次第に実績をあげるに至って、山形県は日本の一大米作地帯としての地位を確立した。特に庄内平野における本間家の努力は、庄内米の今日の声価の基礎を築き、酒田の山居倉庫（サンキョ）はその米倉として我国米穀倉庫史上に不朽の名を残した。

かくて最上川は、山形県の米を主体とする農業県として育成したけれども、今やその米作も限界に達しつつある。これから先き、山形県の進む道は工業方面にその主力が注がれることになるであろう。それはとりも直さず、我国全体の問題でもある。

この意味で、本映画は、本県の特産物である、洋梨、桜桃などの缶詰工業、日本一の生産額をもつ草履表工業、米沢、鶴岡などの繊維工業など本県の工業化への現状を描くと共に、将来本県の電力源として最上川が、工業方面に寄与する道は、主として水力発電であろう。この映画は、最上川の水力発電のダム建設と共水防止の河川改修工事を最后の場面に展開し、この県の二、三男の青年達が、彼等の将来の希望を労働しつつ工業技術を修得することを目指して、この建設工事に精進している姿に最上川と山形県民との将来の結びつきを暗示している。

（終り）